

# 国際俳句 フェスティバル

*International Haiku Convention 2002*

記録集



# 21世紀えひめ俳句賞

## ◎趣意

愛媛出身の四俳人—石田波郷、河東碧梧桐、富澤赤黄男、中村草田男—の名を冠するこの賞は、2000年9月に発表された「松山メツセージ2000（『松山宣言』追補）」の提言に則して、2002年に創設された。

この四俳人は、それぞれ独特で相互に対立することもあつたが、いずれも何らかの意味で子規の精神を継承した者であり、彼らなくして「近代俳句」は存在しなかつたであろう。彼らが20世紀の俳句史に遺した大きな足跡は、今世紀の俳句にも影響を与えて続けるに違いない。

21世紀えひめ俳句賞は、四俳人の業績を顕彰し、今世紀の俳句をリードする優れた句集、評論書等に贈られる。前世紀に活躍した四俳人の名が架け橋となつて、この賞が俳句の持つ可能性を豊かに拓げる誘因となり、今世紀における俳句の更なる飛躍、発展に繋がることを強く願つてゐる。

## ◎対象

平成12年4月1日～平成14年3月31日までに単行本として刊行された句集又は俳句に関する評論・研究書

## ◎種類

石田波郷賞、河東碧梧桐賞、富澤赤黄男賞、中村草田男賞

正賞…メダル、ディプロマ（授賞証書）

副賞…賞金（各50万円）、翻訳本の出版（平成15年度予定）

メダル・本体は砥部焼。デザインとしては、自然豊かな愛媛の気候風土を抽象的な形—天、空、雲、水（雨）、草木（生命）—として捉えることにより、新たな生命を育む図式「天があり、空には雲があり、雨を降らして草木を育む」を表し、豊かな風土の中に多くの俳人を輩出する愛媛のイメージを重ね併せていく。また、メダル

リボンは伊予紺、ケースは桜井漆器が用いられるなど、愛媛の伝統工芸の粹を集め制作した。



## ◎選考委員会

公募と推薦による募集作品の中から、選考委員会の審議により受賞作品を決定する。また、賞名は、受賞作品の内容により選考委員会が決定する。

## ◎選考委員会

委員長	金子 兜太	俳人	現代俳句協会名誉会長
副委員長	篠崎 圭介	俳人	愛媛県俳句協会会长
有馬 朗人	俳人	国際俳句交流協会名誉会長	
川本 鮎嗣	帝塚山学院大学 教授		
齋藤 慎爾	俳人	(深夜叢書社社主)	
宗 左近	詩人		
筑紫 磐井	俳人		
野村 喜和夫	詩人		
芳賀 徹	京都造形芸術大学 学長		
村上 護	作家		

## 参 与

西村我尼吾 俳人

## ◎選考経緯

平成14年5月15日	第1回選考委員会
—	応募作品公募及び識者からの推薦受付
平成14年8月10日	同 受付締め切り(総数96作品)
平成14年9月30日	予備審査

平成14年10月8日 第2回選考委員会  
平成14年11月5日 第3回選考委員会  
平成14年11月5日 受賞者発表

石田波郷賞

研究書

「芭蕉の風景 文化の記憶」

(角川書店)

著者・ハルオ・シラネ (Haruo Shirane)



◎著者略歴

1951年、東京に生まれるが、翌年渡米し帰化する。1970年にコロンビア大学を卒業。1983年に博士号を取得の後、87年にコロンビア大学教授に就任。1988年に「夢の浮橋—源氏物語の詩学」(英語版)がアメリカの優良学術研究書に選ばれ、同書の日本語版は1993年に角川源義賞を受賞する。1997年に「芭蕉の風景 文化の記憶」(英語版)、2001年に同書日本語版を出版する。

◎著書等

■ 「近世文学選集」「創造された古典」「夢の浮橋—源氏物語の詩学」

【授賞コメント】

芭蕉と俳諧に関する歴史的・社会的な考察を通じて、俳句という世界最短の形式が「詩」足りてゐる文学的本質を西洋詩学の手法を用いて鮮やかに解剖し、日本の文学・文化における意義を明らかにした。古典に学び、伝統に対しても理念を与えた石田波郷に因んで「石田波郷賞」を授与する。

句集

「夏石番矢全句集」

越境紀行

(沖積舎)

著者・夏石番矢



◎著者略歴

1955年、兵庫県生まれ。東京大学在学中より作句に励み、同大学院比較文学比較文化博士課程修了。俳句は高柳重信に師事。1981年に「俳句研究」50句入選、1991年には現代俳句協会賞を受賞する。1996年からパリ第七大学客員研究員として渡仏。1998年には吟遊社代表・国際俳句雑誌『吟遊』発行し、2000年に世界俳句協会(WHA)創立に携つた。現在、明治大学法學部教授。

◎著書等

■句集「獵常記」「メトロポリティック」「真空律」「神々のフーガ」「人体オペラ」「楽浪」「巨石巨木学」「地球巡礼」

■評論等「俳句のポエティック」「現代俳句キーワード辞典」「天才のポエジー」「ちびまる子ちゃんの俳句教室」

■共著「現代の俳句」「現代俳句ハンドブック」ほか

【授賞コメント】  
最短定期による表現の旺盛な実験精神、肉厚な詩的エネルギーの爆発力は凄まじい。壯麗な神話的想像力と肉体の生々しい息遣いとの共鳴は、際立つて鮮やかである。

豊かな芸術的才能と、常に新しさを求めて止まない先駆的資質を有した河東碧梧桐に因んで「河東碧梧桐賞」を授与する。

## 富澤赤黄男賞

### 句集

#### 「加藤郁乎俳句集成」

(沖積舎)

著者・加藤郁乎



### ◎著者略歴

1929年、東京生まれ。父・紫舟の手ほどきにより作句を学ぶ。1951年に早稲田大学文学部を卒業の後、日本テレビに勤務。その後退社して文筆業に専念する。1959年に句集『球体感覚』を出版し、以後、俳句、詩、エッセイ、評論等を各種メディアを通じて発表する。

### ◎著書等

- 句集 「えくとぶらすま」「形而情学」「牧歌メロン」「秋の暮」「江戸櫻」「初音」
- 詩集 「終末頌」「荒れるや」「ニルヴァギナ」「姦吟集」「詩篇」「エジプト詩篇」「閑雲野鶴抄」
- 評論集「眺望論」「遊牧空間」「かれ発見せり」「後方見聞録」「夢一筋」「日本は俳句の国か」「イクヤーノフの優雅な私生活」
- 編著他「吉田一穂全集」「詩の歎び」
- 小説集「エトセトラ」「臍内樂」
- 共著「現代彫刻」「現代俳句論叢」「江戸の風流人 正統」「江戸俳諧歳時記」「近世滑稽俳句大全」

【授賞コメント】  
言葉の持つ機能を深く捉えて、俳句に西洋詩、パロディ、俳諧など多様な言説を盛り込み、豊かな前衛性と独自の俳詩的世界を結実させている。常識的な表現を超えた詩として、俳句の可能性を極限にまで追求した富澤赤黄男に因んで「富澤赤黄男賞」を授与する。

句集

「虚空」

著者・長谷川権

(花神社)



◎著者略歴

1954年、熊本県生まれ。「古志」主宰。朝日俳壇選者。1990年、「俳句の宇宙」でサントリ一学芸賞受賞。神奈川県在住。現在、「子規選集」(増進会出版)編集委員。小学館ウイークリーブック「週刊四季花めぐり」に「花の歳時記」を連載中。

◎著書等

■句集「古志」「天球」「古志・天球」「果実」「蓬莱」

■俳論集「俳句の宇宙」

■隨筆集「一度は使ってみたい季節の言葉」「統一度は使ってみたい季節の言葉」

■編著書「現代俳句の鑑賞101」

■共著「遅刻の誕生—近代に日本における時間意識の形成」

【授賞コメント】

句の持つ品格、余裕、本格的俳諧性(対話性)など、古典的美意識を継承しながら、その詩魂は現実の時空に向って澄み、新しさを睨んでエネルギッシュに躍動している。

伝統に深く根ざしながらも、俳句に近代性を求めた中村草田男に因んで「中村草田男賞」を授与する。

# シンポジウム 俳句を訊く

とき：平成14年12月1日 午後3時～4時30分  
会場：愛媛県県民文化会館 サブホール

モデレーター：村上 譲（作家、21世紀えひめ俳句賞選考委員）

著書：「山頭火放浪記」「漂泊の俳人」「放哉評伝」「安至風来記」  
「中原中也の詩と生涯」ほか

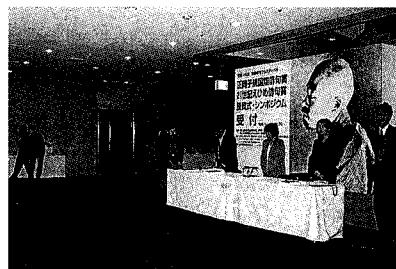
俳句劇「山頭火・風の中ゆく」で全国公演

パネリスト：ハルオ シラネ（石田波郷賞 受賞者）

夏石 番矢（河東碧梧桐賞 受賞者）

加藤 郁乎（富澤赤黄男賞 受賞者）

長谷川 権（中村草田男賞 受賞者）



▼村上 こんにちは。村上謹です。

今日は四人の受賞者の方に、受賞記念のお話を伺うということでも良かったのですが、「俳句を訊く」というタイトルで、ざつくばらんなシンポジウムにしたいと思っています。さて、シラネさんは実作者ではありませんが、あとの三人の方は実作者です。三人の方には自選十句を選んでいただいております。まず俳句の朗読をお願いして、ちょっと肩の力を抜いていただいて、あとは好き勝手なお話を伺います。

まず最初に、夏石さんにお願いします。

▼夏石 最初はプレッシャーがありますが、朗読ですね。これは世界の俳句イベント、詩歌のイベントでは必ず朗読というのがありますので、僭越ながら試みないと存じます。

降る雪を仰げば昇天する如し  
未来より滝を吹き割る風来たる  
海底の泉のむかしむかしかな  
ひんがしに霧の巨人がよこたわる

In the east  
a fog giant  
lies down

龍の骨より生まれては笑う我

いのちひしぬく雲のやちまた涼しけれ

わが俳句九百九十九歳の小杉

一心安樂琉球鳳凰木散華

道は羊へ大西洋へ石の家

イリノイの薙へ越境してくる光

A radiance

crossing border

to an illinois violet

▼村上 俳句は活字で読むというのが普通ですが、もう一つ、音から聞く、耳から聞くともできます。声を出して作者が読んでいただくと別の伝わり方がしますね。詩の朗読というのは多いのですが、俳句では余りされていません。これからは、大いに俳人も耳からも俳句を入れるといいことをやつていけばいいんじゃないかなと思ってます。

次に加藤さんにお願いいたします。(笑)

▼加藤

しばらべ、りへじへじをやつてこませんから。うまくできるか分かりませんが……。(笑)

昼顔の見えるひるすゑほんとがる  
天文や大食の天の鷹を馴らし  
一満月一鞶靼の一橋田  
雨季來りなむ斧一振りの再会  
春しぐれ一行の詩はどこで絶つか  
蘭八のなかるべからず岡時雨  
初松魚あゝがもねえなまりとは



あれとさすゆびが肴や露しぐれ

伊勢るまで待ちて業平覗かな

川筋に子供老いけり春の雪

▼村上 どうもありがとうございました。加藤郁平さんの俳句は、今まで活字だけで読んできましたが、初めて朗読を聞きまして、聞くと何となく分かったような気もいたします。不思議な気持ちで聞いておりました。では、長谷川さんからお願ひいたします。

▼長谷川 『虚空』の中から十句選んでまいりましたので、それを読みます。

千年をまた一つより始めけり

億万の春塵となり大仏

春の塵からくれなるのまじりけり

うねりくる卯波に命ゆだねたる

木のもとに花散らばりて明易し

乾坤に水打つ秋の初めかな

摩天楼の頂に秋来てゐたり

馬追の捨ててゆきたる足ならん

目の穴を水流るるや鮭の骸

夢殿を出でていづこへ秋の道

▼村上 ありがとうございました。三人三様の俳句を活字で読むより、別の伝わり方があるのでないかと思います。それでは、もう一回元に戻りまして、夏石さん。受賞をされた挨拶も無かつたので、5分ぐらいでお話しいただきたいのですが。

▼夏石 お知らせを受けた時に、なぜ私が河東碧梧桐賞なのかなと思いましたが、先程の金子兜太先生のご紹介でようやく判りました。碧梧桐さんのご子孫がいらっしゃいますし、それで何を言おうかと思ったのですが、この碧梧桐さんの一句、「父はわかつてゐた黙つてゐた庭芭」。句集の『八年間』からですけれども、この父は審査員の皆さんです。

▼村上 もうちょっと熱弁を聞けると思つたんですけども、意外に短いのがいいです。

▼夏石 俳人ですから、簡潔が第一、スピーチも短いのがいいです。

▼村上 そうですね。よく、短詩型をやつてているのに俳人の挨拶は長いと言われておりますが、余りにも短かかつたので、ちょっと私が付け加えさせていただきます。

河東碧梧桐などいうと、正岡子規の二大弟子——虚子と碧梧桐——の一人ですが、新傾向俳句運動を起こし、子規の俳句革新を継承した人です。途中でいろいろありまして挫折はしますが、その革新の精神、それは現在も生きているというか、や

はり継いでいかなければいけないと思つております。

夏石さんの受賞は、私自身非常に相応しいものと思つています。現在、俳句の革新に最も努力している中の一人ではないでしょうか。従来の季語というものを、そういう枠組みを解体するというか、バラバラにしまして、詩的な連想力によつてキーワード・俳句における季語でなくてキーワードを中心とした多様な広がりを持つ俳句を作られている。それが碧梧桐賞の受賞に結びついたと個人的に思つています。

次に富澤赤黄男賞の加藤郁平さんです。富澤赤黄男というのは、余計なことを言わせていただきますと、俳句は詩であるという、季語を超えた超季の認識に立つて、昭和10年代の新興俳句運動で『天の狼』という実に優れた句集を出し、戦後も一貫してその姿勢は崩さないで、節を曲げないで通した人だと思います。

その赤黄男賞の加藤郁平さんですが、これも私の個人的な考え方ですが、戦後の現代俳句史の中で画期的な仕事をなさつている方だと思います。例えば赤黄男の戦後の句集に『黙示』がありますが、戦後の句集としては、高柳重信の『路子』、そしてやはりもう一つ挙げると、加藤さんの『球体感覚』という優れた初期の句集になると思います。たいへん赤黄男に相応しい受賞者が第一回に受賞されたということで、愛媛県にとつても、21世紀の俳句にとつても、ありがたいことではなかつたかと思つております。よろしくお願ひします。

▼加藤　お褒めいただきましてありがとうございます、ちょっと場違いの爺が出てきたと思ってご勘弁ください。（笑）

富澤赤黄男賞を愛媛県の俳句、俳諧に心あるお方が入れてくださつたということにまず感謝を申し上げます。この人は昭和における子規みたいな人ですね。ただ、戦野に長くあって、一度ほど応召されましたから空白の期間が長いですな。戦前の新興俳句、戦後俳句、ことに前衛俳句などに多大の影響を与えられました。つまり季のない俳句、無季俳句も唱えられて、非常に実験的な、詩のポエジーを大事になさる方ですから、実験的な仕事をたくさんした方です。高柳重信とか加藤とか、隣の受賞なさつた夏石番矢君というようなこういう素晴らしい男もみんなこの系譜にありますし、非常に影響を受けて勉強させてもらいました。

今回の俳句賞のもとになっているのは大体旧派ですから、その旧派の中に富澤さんが入られたということは誠にありがたい名誉なことで、その末尾において私は誠にありがたく頂戴しようと思ったのです。ただ爺の出る幕ではないと思つて、連絡を頂戴しました時に、できれば若い人に貰つていただきと励みになるのじやないかなと申し上げました。しかし、赤黄男賞の候補が他にいらっしゃらないというお話で私が頂戴することになりましたが、今日はそういうお礼と感謝を含めましてこの席に出させていただきました。

句と歌は、ちょっとイントネーションが違いますね。今日、夏石君が読んだのを初めて聞きましたが、夏石君はこういうのがなかなかうまいですよ。密かに練習してゐるんでしようかね。（笑）それから、外れにいる長谷川櫻さんは、この人はきちんととした俳句を作ってきた俳人でね。他がきちんとしてないというのじやないですかけれどもね。昔『古志』という良い句集があつたのをさつき思い出しまして、ちょっとお話し申し上げたのですが、そういう人もまた賞をいただけるといふ。隣にアメリカか日本かよく分からぬ方がいるのですが、（笑）この方もいただけるということで非常に幅が広い。全体に持ち上げる話ばかりになつていても、まだ何回も続けられるでしょうから、そのうちに世の中にまだまだ隠れていらつしやる方がいるから、是非村上さんを始め皆さん目を光らせて、そういういい人を世にお出し下さい。そ

んな他山の石になればと思つて申し上げました。

▼村上 加藤さんの分厚い句集ですが、読んで面白かったです。改めて全句集を読みまして、面白いと言うのは非常に失礼ですけれども、諧謔味のある俳句は良いと思つています。

長谷川さんは中村草田男賞です。草田男は、波郷と同じように人間探求派の俳人で、戦前は新興俳句の軽薄な素材主義は駄目だとか、モダニズムは駄目だとか、日野草城とミヤコホテル論争というのを何年もかかってやつた…そういう方です。戦後は、文学も重んずるけれども、俳句はやはり形式の中での芸であるという二つのものを掲げた、いわゆる俳人でありますと同時に詩人です。私は中村草田男さんのことを俳詩人と言うのですが、そういう人ではないかと思つています。

長谷川さんは古格—俳人格というのを一時期言われたことがあります、古格を踏まえた丹精な作風で知られている方です。そういう道を一途に突き進むという俳句です。やはり俳句は季語、そして切れがあるのがオリジナルであるし、俳句がこれから国際的に広がつていっても、俳句がオリジナリティを失つてはいけないということです。恐らく波郷が生きていればそういうことを言うでしよう。波郷に言わせれば、韻文精神の徹底と申しましようか。

▼長谷川 草田男賞をいただきまして、自分とは一番対極の人の名前が付いている賞をいただいたという感じがします。つまり今、村上さんから紹介いただいたように、僕は俳句は本当に日本の土着のもので、だからこそ国際的に注目を浴びるのだという考え方をしています。日本語でしか書けない俳句の良さを、ずっと追求していきたいと思っています。そういう意味では、隣にいらっしゃるシラネさんの波郷賞が相応しかったかなあと自分では思っています。（笑）ですから、今回の草田男賞は、もっと俳句の枠を広げて、つまり草田男的な、僕にとつてかなり異質な俳人の素質も咀嚼してこれからやつていけという励ましの意味であろうと思つて、ありがたくいただきました。

俳句の賞は結社の賞とか協会の賞とかたくさんありますが、それぞれ結社の中、協会の中でやつていています。今まで俳壇全体を見回して与える賞というのはほとんどありませんでした。今回の賞は、あらゆる結社、二つの協会の境界を取り払つて選考されたということで、非常に有意義な賞であると思つております。そういう賞の一つをいただけて光榮に思つてゐるところです。

さて、先ほど朗読した句について、「二、三申し上げておきたいことがあります。最初の「千年をまた一つより始めけり」という句は、これは2001年の正月に詠んだ句です。これは2001年の正月でないと詠めません。2001年の千年前は1001年なんですが、1001年はまだ俳句がありませんので、こういう俳句は出ない。3001年も「千年をまた一つより始めけり」なんですが、それまで誰も生きてないわけですから、2001年の正月だけの句です。

今回の句集にはかなり前書きをたくさん付けました。これはただ漫然と付けていいわけじゃなくて、近代俳句の「一句独立」という考え方があるから思つていてるので付けました。芭蕉の名句は、全部芭蕉の人生のそれぞれのコマにはまつてゐるわけです。「一句独立」というのは何かの間違ひじゃないかと思つています。

次の「億万の春塵となり大仏」という句には、「バーミヤン大仏破壊を嘆く人々に」という前書きを付けました。バーミヤンの大仏は壊されてしましましたが、このことを日本のマスコミ、知識人達が「酷いことをする」と非難したわけですかれども、「そいいきり立たずに」という句です。壊れたからといって、元々仏教は物にこだわるなどという教えですから、仏様 자체が壊れることを予測してそこに立つておられるわけです。春塵となつて世界じゅうに散らばつ

てあるという句です。

四句目の「うねりくる卯波に命ゆだねたる」という句の卯波は、夏の始めの大きな波を指しますが、それに命を委ねている。これだけでも勿論読める句で、これに前書きは付けませんでした。ただ心の中で、僕の名古屋の友人である女性が命に関わる大病をしまして、ちょうど手術の直後に名古屋港の船に乗った時の句です。その女性に対する励ましの句でした。

六句目の「摩天楼の頂に秋来てゐたり」という句は、一昨年ニューヨークに行つた時の句です。僕の曾祖父が、半世紀以上も前に20年間亡命生活を送つていた跡を訪ねたのですが、その時に、昨年、破壊されたツインタワーに上り、その頂で詠みました。七月の終わりでしたが、秋の始めの気配が摩天楼の頂だけに早くも来ているという句です。

「馬追の捨ててゆきたる足ならん」という句は、今度の句集に馬追いの一連の句が入つていますが、その一番最後に入れている句です。これはほかの馬追いの句とちょっと違いまして、速水御舟という絵描きがいますが、その人の伝記を頭に思い浮かべながら詠んだ句です。御舟は若い時に都電に引かれてしましました。咄嗟の判断で、手を引かれると絵描きとしてやつていけないので、足を引かせるんですね。それで足がなくなつた。これも前書きは付けておりませんが、僕の気持ちの中ではそういう句です。

▼村上 俳句は一句一句独立と言いますが、そうでもないということで前書きというお話が出ました。これについては恐らく、ハルオシラネさんから、俳句は一つ一つ独立しないという話が後で出てくるのではないかと思います。

シラネさんは石田波郷賞です。伝統的な俳句を作る人は誰もが波郷賞を貰いたいのではないかと。今回はアメリカ在住のシラネさんが受賞者となりました。正に波郷というのは俳人らしい俳人ですね。そういう俳人の賞をシラネさんが貰われたということは、21世紀の俳句がどういう方向に行くのか予測できるような気もして、シラネさんの受賞はいいなあと思っています。

波郷というのは、俳句を非常に単純に、そして緊密な表現で、そして身の丈に合つたものを一息で詠むという、そういう表現方法をした方です。それが韻文精神の徹底ということでしょうが、そういう俳人ではなかつたかと思います。シラネさんは、日本の俳句と英語俳句、そういうものを比較した時に、俳句というものがどういうものであるか。世界の中に日本の俳句を置いた時に、どういうものであるかということ、日本のカウンターカルチャーというか、ヨーロッパ主流の文学、理論から対抗するもう一つの文学、そういうものをお考えになつて、俳句の本質論を説かれています。俳句とは何かということを考えていつた時に、受賞の対象になつた『芭蕉の風景』を読みまして、目から鱗が落ちる俳句論です。日本で俳句評論を書く人も多くいますが、ここまで掘り下げて書かれている人はいないと思つています。

▼シラネ ありがとうございました。こんなに誉められると困りますが、本当に今回、波郷賞を戴いて光榮だと思つています。

『芭蕉の風景』の内容をまとめるのはちょっと難しいのですが、今回、受賞した他の皆さんの発句をとりあげながら、自分の立場を説明させていただきたいと思います。

まず夏石さんの「イリノイの墓越境してくる光」ですが、私の仕事は、一つはこの日本詩歌の「光」を理解することです。歴史的に、文化史的に、また世界文学の上で理解したいと思っています。もう一つは、この「光」を境界を越えるよ

うに持つていただきたいと思つています。ただ、これは易しいことではありません。翻訳だけではなかなか日本の外に「光」を伝えられません。俳句のような短詩型というものは、翻訳だけでは長く生き続けられないものです。

俳句・俳諧に関する今の私の仕事を三つに分けてみましたが一つは研究です。『芭蕉の風景』もその一つです。

もう一つは、目下、英語で歳時記を書いています。例句をつけた万葉集から近代・現代までの日本詩歌の歳時記。これは、歳時記がない限り、日本の詩歌は本当に世界に理解してもらえないという気持ちで書いています。短詩形の問題ですけども、俳句は短詩でありながら、大きい枠の中に入っているから生きるというところが非常に大きいと思っています。そのため、大きい枠がないと世界文学としては光らないと思っています。

もう一つは翻訳です。今までは古典文学中心でして、特に和歌、俳諧を扱ってきました。これからは今この舞台の上に

いらっしゃるような近代、現代の俳人の素晴らしいものも、もっと大きい枠の中で翻訳して、紹介したいと思っています。現在のアメリカでは、やはり芭蕉、蕪村、一茶を基準にして英語俳句を作っています。正岡子規がちょっと入るところです。今、20世紀のものを視野に入れ良い翻訳がぽつぽつ出てきていますけれども、広い視野の中で近代、現代俳句をもっと西洋、欧米に紹介したいと思っています。

私の最初の著書は『源氏物語』について書いたのですが、その後芭蕉に飛んでいつて国文学の人達は皆びっくりしました。私から見れば、非常に繋がっているところがあつて、それは連句的な構造で、『源氏物語』もどんどん繋げて展開していくという基本的なところがあります。『芭蕉の風景』では芭蕉の俳諧のなるべく色々な面を取り上げましたが、一番私にとって重要なのは、比較文学のコンテクストの中で芭蕉の俳諧、俳句を分析するということです。広い意味での比較詩論です。私にとって一番問題になったのは、どうしてこんな短いもの、世界で最短ともいえる俳句という形が詩足りえているか、そういう問い合わせでした。

西洋詩の観点から見れば、とても面白いものは切字です。これは非常にユニークな大きい武器で、もう一つは短詩形から生まれる「間」というか、開かれたスペース。そこに余情というか、その「間」において読者の想像力が働く。その「間」の中で、読者が積極的に参加して作品を完成するというふうに思われます。

しかし、それと同時に、アメリカで長年教えてきた経験ですけれども、外国人が同じ日本の俳句を読んでも、日本人が絶対考へないような反応をする、ことがあります。例えば有名な芭蕉の名句ですが、「夏草や兵どもが夢の跡」。アメリカ人の学生は大体この夏草は枯れた黄色い草、または芝生だというふうに考へる傾向があります。というのは、アメリカの夏は非常に雨が少ないので。日本では、万葉集以来、夏草といえば丈高く繁つてある緑の草なんですね。そこを理解しないと芭蕉の句の半分が死んでしまうように思います。日本の文化、詩歌は、「湿つた文化」だと思っています。霧、霞、雲、雨、五月雨、時雨。湿つているようなものが多くて、歳時記のようなものがない限り、そうしたもののが翻訳では死んでしまうわけです。

芭蕉は平泉・衣川というところで「夏草や」の発句を作りましたが、衣川は「衣」という言葉で恋と深く関係しています。芭蕉はこのような和歌的な連想をひっくり返し、中国詩の伝統にある戦場という場面を導入して、非常に俳諧的に、今までの読みというか、私のいう「文化の記憶」——コード化された約束を変えてしまったのです。東北の多くの歌枕が恋と関係していますが、芭蕉はいろんな意味でその風景を変えてしまったと思います。

英語俳句と比較しますと、一つはつきりしてくるのは、英語俳句には季語がありません。これは根本的な違いです。季節感のある英語俳句は勿論いっぱいありますが、その機能がちょっと違うという気がします。日本に季語のような文化的連想を伴っていません。これは一つは地域の問題で、地域ごとに気候や季節が違うということですけれども、やっぱり一番大きいのは、歳時記のような伝統が無いということです。そのために英語俳句、これはインドの俳句もそうらしいですが、半分近くは日本の川柳に近い。これは悪い意味ではなくて、いい意味で川柳に近いものが含まれていて、川柳と俳句が混じっているような独特なものになっています。

英語俳句と違つて、日本の俳句は個々のテクストが独立して存在するのではなく、詩的なトポスと連想の集合体、私の言葉では「文化の記憶」、「偉大な季節・地誌のアンソロジー」が背景にあって、その中で短いものが生きてくるというところが一つのポイントになっている。ただし、この「文化の記憶」は、ただ静止して動かない集合体ではなく、絶えず変化して展開していく。そうしないと死んでしまう、命を失ってしまうものであつて、それを変えていく力、これを私は「俳諧的創造力」と呼んでいます。ここにいらっしゃる俳人の方々は、そういう意味の俳諧的な創造力をもつて「文化の記憶」を絶えず変化させ、拡大していらっしゃると思います。芭蕉の「夏草や」は衣川を和歌的な恋の場所から、戦場に変えてしまつた。そういう動きが重要なポイントです。

長谷川さんの句ですけれども、「億万の春塵となり大仏」。これは非常に現代的な俳句ですが、やっぱり長い伝統の中に生きているもので、それは時間意識、日本の詩歌特に俳句の本当に深い時間意識を持つてゐると思います。季節の時間だけじゃなくて瞬間的な時間、そして歴史的な時間と記憶、これらが同時に存在しています。歳時記のような大きい文化の記憶がなければ、こんな複雑な効果が短い詩形の中に生み出されるのは困難でしょう。こういう詩的現象を、これからも研究して紹介したいと思います。

▼村上 今のシラネさんの話の中でコンテクスト、大きい「文化の記憶」ということ、もう一つは「偉大な季節・地誌のアンソロジー」ということを挙げられていました。日本の場合には、そういう文脈の中で俳句の切れとか間を取る。その付け合いでいますか、そういうものは必然的に日本人であると自ずと分かるものであつて、適当に付けたのではないかというような論が、シラネさんの著書の中に出でていて、非常に感激したのですが。

▼夏石 なかなか面白い議論とポイントが出てきたと思います。シラネさんの発言中「あれ、私はやばいのかな」と思つたり、「ああなるほど」と思つたり、俳諧、俳句というのは非常に微妙なものだと思います。歳時記というものの、私も歳時記を編ませてもらいましたけれども、歳時記自体が無季を含めたキーワードを入れたり、また変わりつつあるわけです。また歳時記のみならず俳句自体も、互いが理解している短い俳句を解釈する、鑑賞する、受け取るというその補助として歳時記を考えておられる。

私も学者と俳人の創作者という中で、いつも争つていますが、学者の方が保守的にならざるを得ない。これは既存のデータ、既存のものをベースにして話さざるを得ないのでですが、創作者の方はやはり未来に向かつて自分がどうしていきたいかといふことを、少し先走りながらあるいは暴れながらやらざるを得ない。歳時記といふこと 자체も、比喩といふかもつと大きな広がりになりつつある。

歳時記は季感じやなくて、もつと違う何か。人間の心といふのか文化の基本といふのか、何かそういうものを根っこに

しながら歳時記自身が大きく変革、変換していく、あるいは拡大していく。拡大主義というと帝国主義に繋がって、ある一つの価値観で他の国の人達の価値観を押さえてしまうことではなくて、それこそ共同で作り上げていくとまた違う共同の短詩形の創造力の場というのか、これがこの21世紀には生まれるのではないか。

河東碧梧桐も子規の弟子ですから、ひょっとしたらそういう夢物語を考えていたかもしれませんね。シラネさんのお仕事、歳時記の翻訳も期待したいですし、ウイリアム・ヒギンソンさんも『Haiku World (ハイクワールド)』という非常に野心的な仕事をされています。私も『現代俳句キーワード辞典』というのを出していますけども、これ日本語ですけれども、そういう仕事が積み重なつていつてもっと大きな枠組みの、共同というのでしょうか、詩的創造力の殿堂みたいなものが歳時記であり、21世紀に僕は生まれそうな予感がしています。

▼村上 嶽時記というか、シラネさんの考えるのはもっと大きい体系的なものであるけれども、静的、動かないものではなくて動的なものであるということ。そういう一つの文化の記憶というのも、固定したものではなくてやはり動いていくものです。

▼夏石 楽しみですね。

▼シラネ 広い意味の歳時記を今書いている最中です。最初は季語だけの歳時記を考えていたのですが、やればやるほどそれに入らないものが多い。例ええば、恋、恋愛の問題ですね。季語だけでいくと七夕とか猫の恋とか非常に限られてきますが、やはりそれだけでは足りないという気がします。そういう意味で、夏石さんの言つ広い意味の歳時記を考えています。

▼村上 シラネさんは最近、分厚い本で、『Early Modern Japanese Literature anthology (近世文学選集)』という大きい立派な、日本文学が世界に広がるテキストをお作りになります。まだ、俳句の世界に向けたテキスト作りを、これからは古典だけでなく、新しい現代の俳人の作品を入れて作るという意欲を持っていますしやいまして、期待しているわけです。

加藤さん。俳諧にお詳しいのですが。

▼加藤 いやあ、俳諧は大変ですよ。(笑) あんまりはお勧めはしませんけどね。

それと、別に異を唱えるわけじゃないのですが、芭蕉だけが俳諧だというのはどうも小癪に障るんですね。それで、飯島耕一君という長い付き合いの詩を書く友人と、あれも少ししそが曲がつていて、やろうがつていて編みました。(『江戸俳諧にしひがし』みすず書房刊) 俳諧というのは、いろんなまとめ方、攻め方というのはあると思います。

これからアメリカの人などが増えてくると、俳諧という語義の解釈といいますか、随分日本人と違った見方をするのではないかと期待はしています。子規が芭蕉よりは燕村に傾きと云うか重きを置いたように、明治の革新期に広い視野に立つたふところ深い人が出てくれば、これからアメリカから全然違った意味で、例えば其角を始めとする江戸座の俳諧というものに興味を持つて下さつたりすれば、日本人が却つて学ぶ大きいものがあると思います。

江戸俳諧は、探れば探るほど非常に懐が広いんですよ。今度書きましたのは、芭蕉といふのは、ご存知のように旅を歩いて連衆を増やすことに重きを置きました。しかし、江戸の連中といふのは、余り出たがらないですね。其角でいうと三、四回ぐらい西鶴に会いに行くぐらいですから。そういうのが身内の周りの、江戸といつても昔の

江戸は狭いですからね。やっぱり井の中の蛙にならざるを得ないです。江戸俳諧やると非常に行き詰まりを感じました。似たような句がいっぱい出てきますね。

子規居士の俳句分類というのは素晴らしい仕事で、その分類をなさつただけでも大変なのに、天文だとかいろんな付き合いの分類をなさつたのは画期的なことです。そういうのを今度、シラネさんがアメリカで、コロンビア大学でやつてくれるればありがたいと思う。それとは非、日本にちょいちょいお出になつて、歌舞伎とか落語とかに直に接していただきたい。江戸俳諧というのは、歌舞伎の狂言が分からないと半分も分からぬでしよう。

今日十句選びましたが、自作を言うのはちょっと照れますけど、「初松魚あゝつがもねえなまりとは」。これは筑紫磐井君が誉めてくれたのですが、つまり初松魚というと誰だつて新しいと思うに決まっている。魚市場で買えるわけです。ところが、「つがもねえ」というのは簡単にいえば「埒もない」という意味です。黙阿弥みたいな調子で七五調でやるには俳句が一番適しています。こういう宝を忘れて、今の俳人は苦しんで作っているような振りをしていますけれども、私に言わせればちゃんとおかいんですね。（笑）江戸俳諧とかぎり江戸人の伝統には悪態をつくならわしのようなものがあります。私もその伝統を重んじて、悪態の反説的な効用を大事にしてきました。これは既に筑紫磐井君が指摘して下さっています。

江戸の俳諧を見れば材料がころごろしています。まず子規の分類を見てごらんなさい。いっぱいあるから。子規がさすがだと思うのはやっぱり野球を分かつてくれた男ですから、歌舞伎も觀てる。落語も知ってるしね。ちょいと吉原の遊びも知っている。そういう面白い男だったと思います。ついでに加えさせていただければ、悪態というのは江戸俳諧における挨拶のようなものです。

それと隣の蘭八ですが、ご存知のように宮蘭節から分かれました蘭八節というのは、鳥辺山なんていいう名曲がありますが、これを惜しんだ一人に永井荷風という男がおりまして、ご存知の『雨瀧瀧』という名作を、短編を、中編ですかね、書いています。それで岡時雨つて引っ掛けているんですよ。岡時雨なんて言葉は今ほとんど使われていない。昔はたまにあります。

この蘭八は江戸の音曲が、正曲が絶えてしまつといふので、『雨瀧瀧』といふのを荷風さんがござるわけですけれども、私もこれは実は惜しいなと思うんで詠んだんです。それから岡時雨つていうのは、時雨つていうのはご存知のとおり海もあれば山もあるようなところだといふのですが、江戸といふのは筑波山まで行かないと山がありませんからね。まあ箱根の山あるけども。そういう時にやっぱりほとんど岡時雨。時雨つていうのは俳諧では非常に重大な問題といいますか、課題であるんですけど、こういうきれいな言葉があるつていうんで岡時雨を入れた。そんなところですね。

前半は、ちょっと照れますから言いませんけれども、若書きの氣はつかりで、粹がつて何を作っていたんだか分からんないわけですよ。まあ夏石君がこの天文のや何かをとつても誉めてくれたいい文章を書いてくださつたです。だから今夏石君の句が非常にスケールが大きいのは、やっぱり私の影響を甚大に受けている。

▼夏石 そのとおりです。

▼加藤 それからこの伊勢るまでというのは、『俳句研究』という雑誌がございましてね。そこが別冊を出すから、何かお前も平成の俳句を書けつて言うから五句選んで入れておきました。「伊勢る」つていうのは近頃使いませんが、「寄せる」

つて言つてね、裁縫なさる方は分かるでしよう。編物のことを「寄せる」つていうんですよ。樋口一葉なんかはちゃんと書いています。辞典の中じゃね、「大言海」とかいろいろ出でます。それを訛つて伊勢るつて言うんですね。それで私は業平覗つていうのを『伊勢物語』とかに引っかけて入れたわけです。

それから今日は少しサービスしましようか。最後の句はみんな引っかかると思いますよ。そんな言い方良くないがね。読めばこんな簡単な句はないんですよ。「川筋に子供老いけり春の雪」。子供が老いていくのは当たり前じゃないですか。ところが川筋つていうのは深川しか言わんないんです。江戸のことを知らないと川筋つて何だか分かんないわけですよ。あそこだけを川筋と申します。昔は岡場所がありまして吉原に対抗していた。それで川筋なんです。子供屋つていうのは芸者屋つて言うと聞こえがいいけれども、簡単に言えば深川の女郎屋ですよ。それを子供屋と言つんですよ。これも夏石君が誉めてくれましたが、「子供屋のコリドン」っていう句が私にございまして、その続編みたいなもんですね。そして「春の雪」っていうのは淡雪ですね。

しかし、てめえの句を解釈するくらい野暮でみつともねえことはないですね。(笑)まあそんなことです。あとはどうつてことありませんよ。こんなものは。

歳時記の話が出たから申し上げますと、完全な歳時記つていうのはあり得ないです。それを覚悟の上でアメリカの方はやらないと大変ですよ。これから歳時記にニューヨークの春とか、いろんなのがやつぱり出てくるでしょうからね。(笑)5丁目の地下鉄がどうしたとか何とかというのがあるでしょ。そういう意味で腹を括つてやらないと大変です。だからそれをまとめて下さつたらありがたいし、是非日本の方ともご相談なさいまして、世界の文化のためにね。話は大きく持つていった方がいいんですよ。こういったのは。(笑)ちまちましてないでね。日本にも夏石君みたいに外国文学ができるのもおりますし、相談して共同作業でやってくださいよ。実にありがとうございます。それで、その頃までこの賞が統けば大賞を差し上げて……。愛媛県の名誉のためにも申し上げます。(拍手)

▼村上 俳諧の奥深い、難しい、怖い話をいろいろお聞きしましたですが、長谷川さんもいろいろご意見あると思いますが。

▼長谷川 シラネさんの著書について一言申し上げると、出た時に驚きました。つまりアメリカの方がこれだけの本を書かれたというので、いろんなところで是非読めと勧めた本の一つです。何故そういうふうに思ったかというと、外国語で俳句を作られる人の俳句を拝見すると、やはりどこか日本の俳句と違つてしまつて、川柳に近いというか、意味がたくさん入つています。どうして外国人人が俳句に興味を持つのかなと考えると、要するに最初の取っ掛かりは多分俳句が短いといふところだと思つんですね。それが今までの外国の俳句だと思うんです。

シラネさんの本を読むと、間とか切れとかの解説があつて、それも日本の俳人が今はとても書かないような指摘があります。短い詩としての俳句じゃなくて、切れとか間、そういうものを含んだ俳句というものに、やつとアメリカの人気が気づいたかと非常に驚いたわけです。本当のアメリカ人だったらお株を明け渡さなくちゃいけないのですが、半分日本人でいらっしゃるので安心しました。

俳句にとつて切れというのは本当に命みたいなのですから。これから俳句が世界に広がつていくとすると、その「切れ」をそれぞれの言語の中でどう実現していくかが、本当の意味での国際化にとって重要な思います。

▼村上 そのとおりだと思います。シラネさんはそれに対して如何ですか。

▼シラネ さつき英語俳句に季語が基本的にはないと申しましたが、切字のようなものはあります。切字である「かな」とか「や」とかそういう特別の言葉は無いけれど、切字の生み出す効果が、有効に使われています。切字の効果は、国際俳句にとって一番大きい武器じゃないか。武器というと悪いですけれども、重要なテクニックとしてやっぱり活きている。

それとまた別の問題ですけれども、せつかく受賞者がいらっしゃるから一つお聞きしたいことがあります。現代俳句を読んで一番気になるのはファイクション、ノンファイクションの問題です。これは時間とも関連しています。

俳句が現在から出発して展開していくのか、それとも違う時点から、違う次元から出発しているのかという問題です。例えば古典的な俳句を見ると、芭蕉は非常にその場の時間を重視しますが、それに対しても藤村は想像の世界から出発している。藤村の8割は多分そうだと思います。俳諧の大きい流れの中で、現在から出発すると想像の世界から出発するのと基本的に二つあって、今活躍している俳人から見て、これをどういうふうに自分の中で受け取っているのか、という質問です。

▼夏石 これはもう正岡子規、あるいはその前に多分答えたが一応出でているかもしません。子規は写生、写生と言われていましたけれども、『俳諧大要』という本の中では「非空非実」と言っています。非空は空想でもない、非実は現実でもない。現実、空想どちらからも離れたもっと自由な立場から、子規は百年以上前に言っています。

もう一つ、キーワードで言いますと俳諧は自由です。いわゆる「俳諧自由」ですね。そのあたりを俳人というのではなくと自由自在にタイムマシンで飛んでもいいんじゃないかというのが私の答えです。

▼長谷川 空想が現実かという問題ですね。子規が写生ということを言つたわけですが、子規の写生は、彼は病床に寝てゐるわけですから、現実を写生すると病床の周りのことだけしか言えません。ところが實際残つてゐる子規の俳句はいろいろなこと詠んでいます。世界中のこと。日本の富士山の話とか。彼は空想で詠んでいるわけです。ただ普通の俳人と違うのは、空想で詠んだものも目に見えるように詠んでいるんです。だから子規の写生つていうのは目に見えるものを詠め、現実を詠めというのじゃなくて、目に見えないものも目に見えるように詠めつていう意味なんですね。

そのところを子規から時代が下るにつれて現代俳句はちょっと捻つてしまつて、目に見えるように詠めつていうところを軽んじて、目に見えるものだけを詠めといふ範を嵌めているみたいなところがあります。

▼村上 シラネさん、大体よろしいですか。

▼シラネ もう一つの問題ですが、句会と結社の問題です。そこには共同の想像が働いています。個人であると同時にグループの間に働く想像力。そこに俳句の一つの大きい特徴があるのではないか。だから現在でもあるし今、こことは違うところもあるというような。

▼村上 それが現在であり、違つてもみんな理解できるわけですね。共同の基盤みたいなものがありますからね。加藤さん何かございませんですか、今の空想とか。俳諧はどうなんでしょうか。

▼加藤 俳諧で世界という言葉をよく使います。これは歌舞伎でも狂言でも世界、世界と言つんですね。当時、三百年前、もつと前から世界という言葉は使われています。それは「わしらの世界は」という意味で使つんですよ。世間とか世の中と直してもよろしいでしょう。世界意識なんか勿論鎖国してますからないですけどね。子規をきちんと読んでいる長

谷川さんが言われるその通りだと思う。子規っていうのは本当に病床六尺でよくああいうものを詠まれているなと思う。それで好きな柿の句とか歌というと沢山るように、一つに集中すると非常によくお作りになつた人ですね。漱石とか良い友人がいましたから刺激も受けたんだと思ひますけれども、なんせ三十幾つで若過ぎてもう勿体無くてならない。

ご存知のように『子規全集』っていうのは何次かにわたつて出ましたが、その影の功労者をここで一つはつきり申し上げておきたいんです。これはご存知のように寒川鼠骨さんが勿論主になつていますが、柴田宵曲という人をお忘れになつてもらつては困るんです。この宵曲さんがいないと、あれだけまとめておいてくれなかつたら、今の子規全集というのにはあり得ないです。子規庵に風呂敷包みを持つて毎日のように通つてね。宵曲さんの書体は子規居士に似てきたつていうことをみんなが言つようになつてくるくらいの人です。そういうことも一つ合わせて。

それを森銑三という方が非常に嘆いて、文庫本のために新たに筆をおろされてお書きになつていますけども、非常に親しい、仲の良かつた二人でした。だから今日の子規全集が残された仕事にそういうことがあるということです。それで子規にも間違いがある。それを正したのが宵曲さんの文集としてまとめられたのがありますから、機会があつたら是非ご一瞥を賜りたいです。これはかなりありますよ。子規か牧水かのどちらかの間違いで歌が違つているのがあります。そういうことはほとんど指摘する人が少なくなりましたね。コンピュータか何だかもう変な話が多くて、大事なことがみんなぽけているんですよ。

それからご承知のように、岩波文庫で何冊も続けざまつて言つていいくらいに、柴田宵曲のそういう文庫本をお作りになつたつていうのは大変なことでありますし、宵曲さんを支えたのは幽明境を異にした子規居士です。俳人としても宵曲さんは子規に捧げた記がいろいろございますから是非お読みください。とてもいいものがあります。できれば子規の分類を一山下一海さんが何かで話されたことがありますがもう一度再分類するような形でなさると面白いんじゃないでしょうか。元の本は欠字が多いんですよ。子規居士もお尻が痛かつたり腰が痛かつたりするでしょう。抜けている。元句が抜けている場合もあるでしようけれども、私もそこまで入らなかつたけれども、私もちよつとおいそれたことを考へて、あそこに出でてくる俳人を調べてやろうと思ってかかつたんだけれども、とんでもない話で……。その一部が『古句を観る』という柴田宵曲の名著となつた。文庫の中に入つてますが、あれはほとんど無名の俳人です。そういう意味でも、子規のそういう薰陶大なるものがありましたね。子規は素晴らしい優しい男ですよ。そういう無名の人をきちんと拾つておいてくれました。心からお札を申し上げたいと思います。

▼村上 どうもありがとうございます。今、加藤郁平さんが21世紀えひめ俳句の課題というか、子規継承でどうするかと同時に、それだけじゃなくて今後への問題提起もされました。ちょうど時間が来てしまいましたので、今のお話をここに頂戴しまして今日の「俳句を訊く」の結論にさせていただきます。（拍手）